



学校便り 11月号

かけはし

薩摩川内市立里小学校 薩摩川内市里町里 1601 TEL 09969-3-2008
発行 令和5年10月17日 責任者 校長 永野 俊也

学校HP



学校ブログ



里周辺海水温
24℃(11/5)



「月の光」と心の景色 人権週間に寄せて

校長 永野 俊也

立冬を過ぎ、急に気温が下がってきました。ものすごく暑い夏から、このまま気温が下がって一気に冬らしくなると、「えっ、秋って実質1か月半ぐらいだった？」とちょっと損した気持ちになるのは私だけでしょうか？ このまま地球温暖化が進むと、日本の春と秋はどんどん短くなるという話を聞いたことがあり、少し心配になりました。

そういう中でも、里の秋は八幡神社の秋の大祭「^{ないしまい}内侍舞・^{なおらい}直会」の他、4年ぶりに開催された宮相撲など、秋の雰囲気を感じさせてくれました。また、校内を巡ると子供たちなりに感じた秋の作品が至る所にあり、県民週間で学校を訪問された方は、作品を通じた秋を感じていただけたのではないのでしょうか。

さて今月は、「月の光」にスポットを当ててみました。写真は、澄んだ青空に浮かぶ11月2日の月で、俳句の世界では「昼の月」と言い、季語は秋となります。ある方が「この光景に感動して…」と話されたのをきっかけに、「月の光」を勉強していた大学時代を、懐かしく思い出しました。

文学、美術、音楽といった芸術の世界は、19世紀後半大転換期を迎えます。今まで無色透明と思われていた光が、7色の光からできているという科学的発見により、美術の世界では、絶対的な色に対する価値観がゆらぎ、心のあり方で、感じる色合いの印象が多彩に変化する印象派が生まれます。また、それより先に文学では、ロマン的な心情を自由に表現できる世界が飽和状態となり、その壁を破るため様々な試みがなされていきます。詩の世界では、言葉や文脈から、読者の心に訴える世界から、言葉自体がもつ香りや音律といったものに光をあて、言葉や文脈といった概念を超えて無限の広がり求めた象徴派が生まれます。

大学時代、「きれいな曲…」と楽譜を手にして歌ってみよう。と思った詩がフランスの詩人ヴェルレーヌの「月の光」でした。その詩を読んで、立ちつくしてしまいました。「意味がわからない…」(どう表現したらよいのか…)

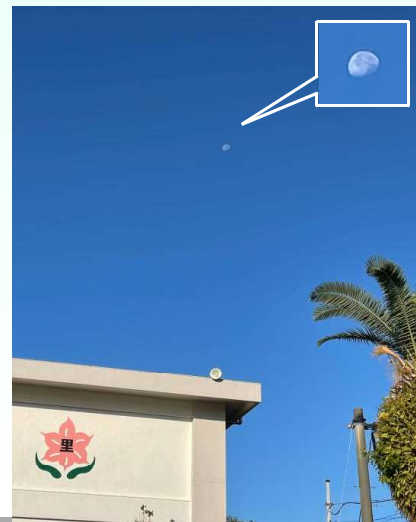
歌手として、言葉の意味だけに捕らわれていた自分を、見つめ直すきっかけとなった作品でした。(これを機に、近代フランス詩を勉強したいと思うようになりました。)

現代、それからこれからの時代は、より個別化、多様化の時代へ進展しようとしています。その中で、古い価値観で物事を見つめると、壁に当たり戸惑う場面が出てくるのではないかと思います。

来月12月1日～10日は、人権週を迎えます。世界各所で起こっている戦争が早く終結することを願うと共に、これを機会に、性的マイノリティや障がい者支援など、従来の人権問題に加えて幅広く人権について学ぶ機会となり、みんなが笑顔で過ごせる明るい社会につなげていければと思います。



舞嬢の美空さん



1～4年生の社会科見学

10月20日、昨年までの1日遠足を社会科見学という形で実施しました。

今年度は、平良地区のフィールドワークを中心に、まず帽子山展望所に上がり、平良集落の全体を把握してから、旧平良小中学校へ移動しました。そこを起点にグループに分かれてフィールドワークを行いました。



平良の街並みや、港の歴史などを学ぶことができました。

また午後は、航空自衛隊下飯駐屯地にバスで移動し、航空自衛隊の仕事内容や、実際に防衛装備品をつけさせてもらうなどの体験ができて、とても勉強になりました。自衛隊の皆さん、ありがとうございました。

6年生の国体見学に宮相撲!

10月13日6年生は、51年ぶりに開催された鹿児島国体のウエイトリフティング競技を見学に入来入の体育館まで出かけてきました。トップアスリートの気迫のこもった競技に、みんな感動したようです。



10月15日の宮相撲も迫力ある熱戦が繰り広げられました!



読書旬間(11/6～17)

読書の秋にふさわしい読書旬間を迎えています。この期間、先生方や図書委員会による読み聞かせ等が行われています。



これを機会に良書にたくさんふれてください。



12月行事

- 1日(金) 人権旬間(～14日)
- 6日(水) 委員会活動
- 7日(木) 持久走大会
- 9日(土) 土曜授業・PTA 空き瓶回収
- 13日(水) 人権の花開校式(特別校時)
- 14日(木) 第4回学校運営評議会
かのこゆり号来校
- 22日(金) 終業式 大掃除
- 28日(木) 仕事納め



【お知らせ】・学校北側の古池の整地が完了しました(150周年事業)。
・川薩地区にインフルエンザ警報が発令されています。予防に努めましょう。



今月の付録

海との共生 甌島の海のお話 きびなごのひみつ (その2)

今月まで、サメ話題を取り上げたいと思います。先月号で「人食いザメっているの？」との問いに対しては、「人を好んで食べることはありません」と否定しました。地球規模で年間の死亡事故は、5～6件ぐらいです。ただ、好物と勘違いされて **かぶっつ** とかまれたら大変ですからと、特に危険度の高いサメを3種紹介しました（サメは約150種いますが、そのうち人を噛む可能性があるのは20種程度で、実際の被害は、ほとんどが前回紹介した3種によります）。


今回は、せっかくですから特徴的なサメをもう1種紹介します。

それは、**この子** シュモクザメ 洋名を ハンマーヘッドシャーク と言うように、頭が金づちの形をしていて、とても特徴的です。甌島でも小型のものが漁師さんの網にかかったりするようです。なぜ、このような頭の形をしているかという、このサメも獲物の筋肉が動くときに出る弱い電気信号を感知し捕食します。その器官がこの頭に集中していて、地雷探知機のように働かせながら、好物のヒラメやイカを探すことに使われ、さらには、頭で押さえ込むのにも適しているからこの形になったと言われて

います（目は離れているので、立体的に獲物を認識するのに適しますが、その代わり正面が死角となります）。この子、実はダイバーにとってはとても人気のあるサメです。そして世界的にも有名なダイビングスポットが日本に2箇所あり、世界中のダイバーが訪れます。一つは静岡県伊豆の神子元、もう一つが沖縄県の与那国島です。どちらもシーズンになると200～300匹の群れを作り、ダイバーからはハンマーリバー（ハンマーの川）と呼ばれ、その川に出会うために船から飛び込み、グループで潮流に乗りながらサメを探すドリフトダイブが行われます。

私もダイバーの修業時代、友人に誘われて与那国の海を潜ってきましたが、360°全方位視界がブルーの中、すーっと現れる群れに出会った時の感動は忘れることができません（ちなみに与那国島は日本国土の最西端で、天気がよければ台湾が見えます。日本の東西南北の端っこで一般人が立ち入れるのは、西端の与那国島だけです）。



そうそう、先月号のつづき、危険度の高いサメに出会った時の対処法でした。

ばったり、 に出会ってしまったら… **戦う!** はダメです。戦ってはいけません！

一番よくないのは、**パニックになって、大慌てで逃げる!** です。動物は、最近被害の多いクマもそうですが、背を向けて慌てて逃げる姿を見ると本能的に追いかけてしまいます。クマは、防御姿勢をとっての死んだふりはある程度有効ですが、サメに死んだふりは通用しません。特に、パニックでバシャバシャ水音を立てると、興奮状態にスイッチが入ってしまい向かってきてしまいます。正しい対処法は、


音をなるべく立てないように、サメの方を見ながらそっと離れる。 が正解です。その際、大きな岩やテトラ、船などを背にすると、正面方向だけに集中できますし、大抵の場合、サメは去っていきます。そして何よりも「サメが出た!」という所は近づかないが、1番の対策です。オオメジロザメやイタチザメは南方系ですから、水温26℃以上の海を好みます。今水温は24℃まで下がってますから、もう南の海へ帰って行ったはず。

漁師さんたちは近づかない訳にはいかず、時に血の匂いのする魚を持っていて、サメが寄ってきたりします。また、意外に思うかもしれませんが、**お〇っこ** も、血の匂いと同じ効果があります。もしサメが来たら、そっと離れてテトラや船に張り付くと、諦めて去っていくことがほとんどですから、安易に魚を捨ててその隙に逃げようとしないう方がよいそうです。餌付けすることになり、その付近に住みつき、次姿を見たら積極的に寄ってくるようになるからです。サメは人のように日頃目にしないものを見たとき、例え美味しそうな匂いがしてもいきなり襲いません。先ずはぐるぐる回って様子を見て、いよいよ来る! という時は、胸ヒレを下げ、腰をフリフリする捕食行動を取りますから、そうなったら魚を捨てて、ここで初めて戦うことを考えます。棒のようなものを持っていれば、サメの急所は、器官の集中する鼻の頭だったり、やわらかい目やエラですから、そこをヒットできれば、逃げていきます。多くの漁師さんは、そうして難を逃れてきました。

さて、長く書いてしまいました。サメは怖いのは確かですが、サメだって人は怖いんです。サメは  や、  の材料となりますし、酷い時は、高級食材フカヒレとして、ヒレだけ切り取られ、捨てられたりします。乱獲が進んだ現在、多くのサメが絶滅の危機に瀕しています（シュモクザメや、イタチザメは絶滅危惧種、私が見たオオメジロザメは準絶滅危惧種です）。

網を破ったり、時に、噛みついてきたりと厄介なサメですが、サメにはサメなりの言い分もあるのではないかと、今回とても考えさせられました。

「海との共生」を考えると、「知ること」はとても大切なのだと思いました。

そういうことで、休日「かごしま水族館」を訪ね、学芸員の方に  きびなご のことを質問してきたのですが、困ったことが起きてしまいました… (つづく)



与那国島のシュモクザメ